

SRC 自主調査の調査結果について

量的調査における「孤独感尺度」等の機能的特性に関する調査研究
－UCLA孤独感尺度日本語短縮版を中心とした比較分析の結果－

I. 調査研究の背景と趣旨

- 2024年4月1日に孤独・孤立対策推進法が施行された。「孤独」への政策的な関心はSDGsやWell-Being政策のメインストリーム化とともに国内外で高まっている。実態把握・解明に向けた調査・研究も国内外で進められおり、日本国内では2021年から「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査」(統計調査法の一般統計調査)、JSTによる「社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築」(SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム)等の大規模な調査・研究プロジェクトも進められている。
- こうした昨今の関心の背景には、「孤独」が誰もが陥るリスクであるとの認識があり、またその認識の背景に社会構造の変化への視線がある。長らく個人の心理的特性として認識されてきた「孤独」が社会構造の変化と結びつくことで、今般、社会的課題としても認識されるようになったものと理解される。
- 「孤独」へ学術的関心はより古い。1960年代には心理学的な研究の基礎が築かれ、70年代に大きく進展したとの評価がある(広沢、2011)。前述の「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査」で使用されているUCLA孤独感尺度の初版も1978年に開発されている(Russell et al., 1978)。
- その後も孤独感尺度の開発・改良は継続的、断続的に進んできており、UCLA孤独感尺度は1996年の第三版において高度に信頼性のある汎用可能尺度として評価されるに至っている(舩田他、2012)。主に量的調査向けの簡易版の開発も継続的・断続的に進められてきており、日本国内ではUCLA孤独感尺度の日本語短縮版の開発や、独自の改良版等の開発は最近においても行われている。その結果として現在では量的調査で使われる孤独感尺度が複数存在し、実際に複数の尺度が使用されている。このような状況において、各孤独感尺度の機能的な特性を明らかにすることの重要性は論を俟たないであろう。
- 以上の認識のもと、国内で量的調査に使用されている複数の孤独感尺度の機能的な特性の解明に臨むこととした。その過程では、複数の孤独感尺度を質問に組み込んだ量的調査を実施し、各尺度による孤独感データを一度に収集した。その上で測定データを比較分析し、特に尺度間の測定差異に注目して各孤独感尺度の機能的特性の解明に迫ることとした。
- 各尺度は開発過程において、それぞれ信頼性や妥当性の評価が行われており、短縮版・独自改良版等では主にUCLA孤独感尺度(フルバージョン)との比較検証等も行われている。日本語版の開発では日本国内のデータで信頼性・妥当性が検証されている。一方で、それぞれ個別に開発された尺度を相対的に比較して機能的な特性を明らかにするアプローチは国内ではみられない。本研究は、そのアプローチを採るものである。

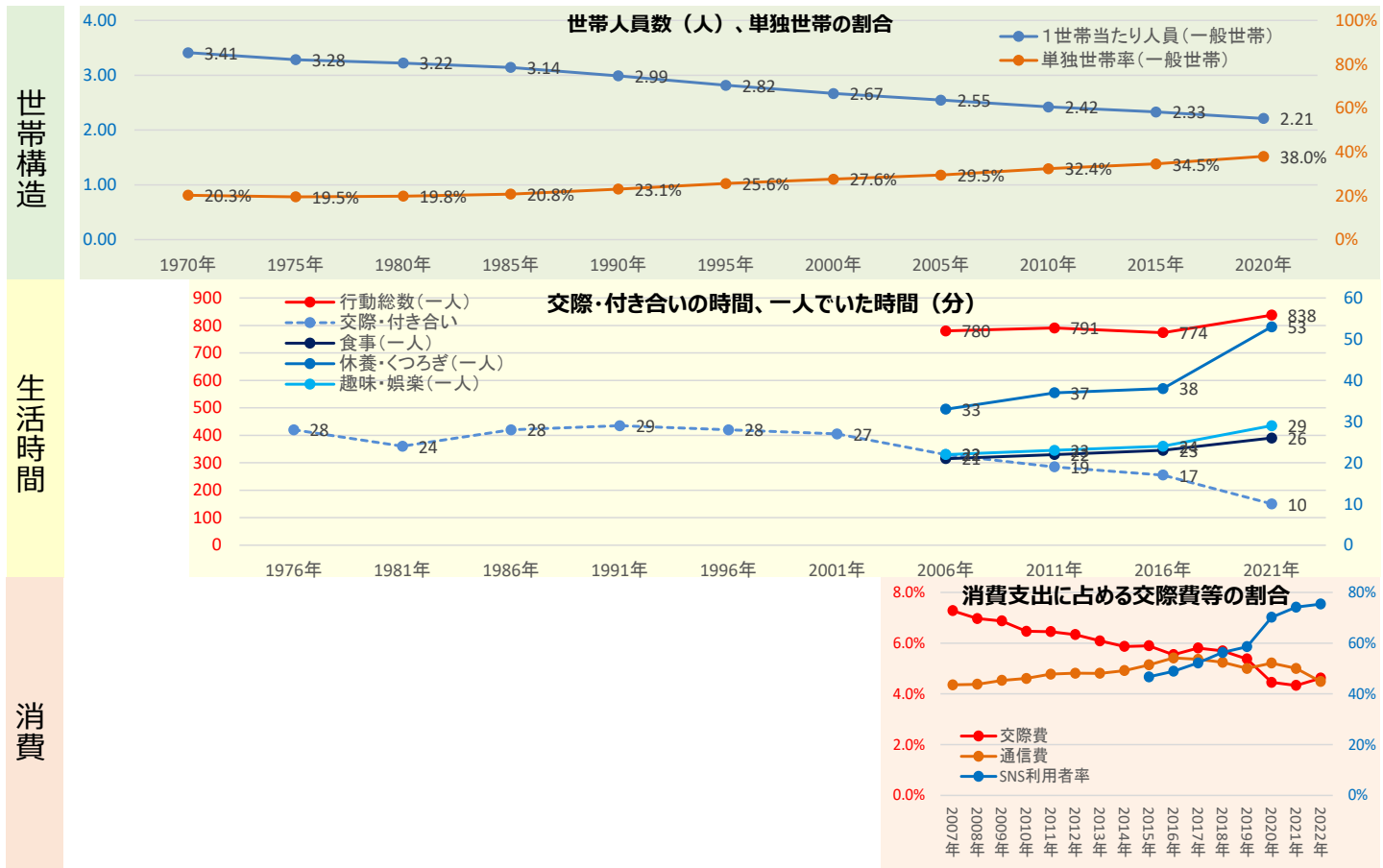
報告内容

- I. 調査研究の背景と趣旨
- II. 調査研究の方法
- III. 分析結果
 - 1. 基礎的分析
 - 2. 属性バイアス
 - 3. 精神状態や主観的Well-Beingの説明力
 - 4. 孤独のセルフスティグマの影響の検討
- IV. まとめと今後の課題
- 参考文献
- 資料(調査票)

I. 調査研究の背景と趣旨

統計データに見る社会関係の変化

- 孤独・孤立対策推進推進法第1条では、「社会の変化により個人と社会及び他者との関わりが希薄になる」ことを孤独の背景として触れている。ここでは孤独感尺度の比較分析に先立って、統計データにより社会関係の変化の様子を概観し、今日的な孤独の背景を大まかにとらえておく。
- データを「世帯構造」「生活時間」「消費支出」の側面からたどっていくと、以下のことが読み取れる。
 - ・ 世帯構造の変化をみると、趨勢的に1世帯当たりの人員が減少し、単独世帯の割合が増加している。
 - ・ 生活時間の変化をみると、2000年代以降、「交際・付き合い」の時間が減少傾向にある。また、一人で「食事」「休養・くつろぎ」「趣味・娯楽」をする時間が増加傾向にある。
 - ・ 消費支出の変化をみると、「交際費」が減少傾向にある。
 - ・ SNS利用状況の変化をみると、SNS利用率は上昇傾向にある。
- 以上の変化には、長期にわたる緩やかな変化と、近年の急速な変化とが確認される。長期的な変化に加えて、2020年からのCovid-19パンデミックに伴う経済社会の変化が、個人の社会関係行動にもインパクトを及ぼした様子がうかがえる。近年、従来以上に多くの人に孤独を実感しやすい状況が広がった可能性があると思定される。



【データ】

- ・国勢調査（一般世帯）
- ・家計調査（二人以上の世帯のうち勤労者世帯）
- ・社会生活基本調査（調査票A、15歳以上）
- ・通信利用動向調査（世帯構成員）

Ⅱ. 調査研究の方法

1. 調査研究の全体スコープと分析ステップ

① 調査研究の全体スコープ

- 本研究では、国内の量的調査で使用されている複数の孤独感尺度の比較分析を通じて、各尺度の機能的な特性を明らかにする。
- 分析にあたって、まず対象とする複数の孤独感尺度を構成する質問を組み込んだ量的調査を実施し、各尺度による孤独感データを収集する。同じ対象者から複数の尺度による孤独感データを一度に収集することによって、個人・時点を統制したデータを得る。個人・時点が統制された測定データを比較し、その差異を明らかにすることで各孤独感尺度の機能的特性を把握する。
- 機能的特性の把握に向けた比較分析では、①属性バイアスの現れ方、②精神状態や主観的Well-Beingの説明力、③孤独のセルフスティグマの影響の3点に注目する。①～③の主旨は以下の通りである。

比較分析	主旨
①属性バイアスの現れ方	各孤独感尺度には属性の状況がどのように現れるか（同じ属性の孤独感尺度の種類を問わず同じに現れるか、尺度によって違いが現れるか、どのような属性の測定で違いが現れるか）
②精神状態や主観的Well-Beingの説明力	各尺度で測定された孤独感は、精神状態や主観的Well-Beingをどのように説明できるか（各孤独感尺度による測定データは、尺度の種類を問わず回答者の精神状態と同じに説明しえるか、尺度によって違いが現れるか、どのような違いが現れるか）
③孤独のセルフスティグマの影響	孤独感尺度の開発、孤独感の測定ではセルフスティグマ（自己偏見）の影響に配慮されてきたが、各尺度で測定された孤独感にはセルフスティグマが影響していないか（各孤独感尺度による測定データには、孤独のセルフスティグマが影響していないか、尺度によって影響の有無や程度に違いがあるか、どのような違いがあるか）

② 分析ステップ

- 本調査研究では、以下の手順で分析を進めた。

（分析ステップ）

（作業方法・手順）

基礎分析

孤独感尺度別の孤独感スコアの把握

- 回答データから各孤独感尺度による孤独感スコアを算出

各孤独感尺度の信頼性の検証

- Cronbachの α 係数により、各尺度の内的一貫性を確認・評価

孤独感尺度別のスコア分布の把握

- ヒストグラムにより、各尺度による孤独感スコアの分布を可視化して比較。またクロス集計により各尺度による孤独感スコアの分布の対応状況を把握

属性バイアス

各尺度による属性別孤独感スコアの差異

- 孤独感スコアを標準化した上で各尺度による孤独感スコア（ z 値の平均値）を属性別に算出し、尺度間の水準差を把握
- 分散分析により、属性ごとに尺度間での孤独感スコアの有意差の有無を検証
- 多重比較により、有意な差が生じていた尺度を特定

各尺度による孤独感スコア説明モデルの差異

- 属性を説明変数とした重回帰分析により、各尺度による属性感スコアの説明モデルを導出し、各モデルの差異を検討

精神状態

孤独感スコアの精神状態や主観的Well-Beingへの影響

- 属性に各尺度による孤独感スコアを説明変数に加えた重回帰分析により、精神状態（K6・WHO-5）や主観的Well-Beingの説明モデルを導出し、各モデルを比較

セルフスティグマ

回答拒否感の孤独感スコアへの影響

- 属性に各尺度への回答拒否感を説明変数に加えた重回帰分析により孤独感スコア説明モデルを導出し、各モデルを比較

回答拒否感の回答時間への影響

- 回答拒否感を説明変数に加えた重回帰分析により回答時間説明モデルを導出し、各モデルを比較

Ⅱ. 調査研究の方法

2. 調査設計(データの収集)

- 実証分析用のデータを収集するため、以下の通り1000人規模のインターネット調査を実施した。
- 属性バイアスの分析を念頭におき、幅広い層を対象とした。なお、日本の人口構造に近づけるため、性別・年齢・地域別に層化し、人口構成比に基づいて各層の回収数を割当てた。
- 孤独感尺度では4つの尺度を取り上げた。各尺度の詳細については次項に示す。
- 孤独感尺度の比較検証に使用する変数としては、主に属性バイアスの検証用として人口統計学的属性を設定した。また、主に精神状態や主観的Well-Beingの説明の検証用としてK6、WHO-5、生活満足度、ソーシャルネットワーク満足度を設定した。K6やWHO-5は精神抑うつ状態・健康状態等を測る代表的な尺度であり、精神疾患のスクリーニング等にも使用されている。他方、生活満足度は主観的Well-Beingの代表的尺度であり、ソーシャルネットワーク満足度（人とのつながりの満足度）も社会関係の主観的Well-Beingを測る尺度である。また、社会的つながり・社会的孤立状態を測る尺度としてLSNS-6も加えた。これらは孤独感尺度の開発過程において妥当性の検証等にも使用されている尺度である。
- 調査名については、セルフスティグマを刺激しないように「孤独」を連想しにくい「日常生活に関する調査」とし、回答バイアスの増幅抑制を図った。

調査実施概要	
● 調査タイトル：「日常生活に関する調査」 ● 調査対象：日本国内に住む15～74歳 ● 対象者数：1000人 ● 回収割当：性別（2）×年齢別（4）×地域別（6）の48層に層化し、令和2年国勢調査の人口構成比で割当 ● 調査方法：インターネット調査 ● 調査期間：2023年9月27日～10月4日 ● 調査内容：孤独感、主観的ウェルビーイング・精神状態、属性、生活行動・環境、回答拒否感	

		回収割当数(令和2年国調構成比で割当)				
		15-29歳	30-44歳	45-59歳	60-74歳	計
男	北海道・東北	10	13	15	16	54
	関東	37	47	54	42	180
	中部	18	22	27	24	91
	近畿	16	19	23	20	78
	中国・四国	8	10	12	12	42
	九州・沖縄	10	13	14	16	53
	計	99	124	145	130	498
女	北海道・東北	9	13	16	18	56
	関東	35	44	51	44	174
	中部	17	21	26	26	90
	近畿	16	20	24	23	83
	中国・四国	8	10	12	13	43
	九州・沖縄	10	14	15	17	56
	計	95	122	144	141	502

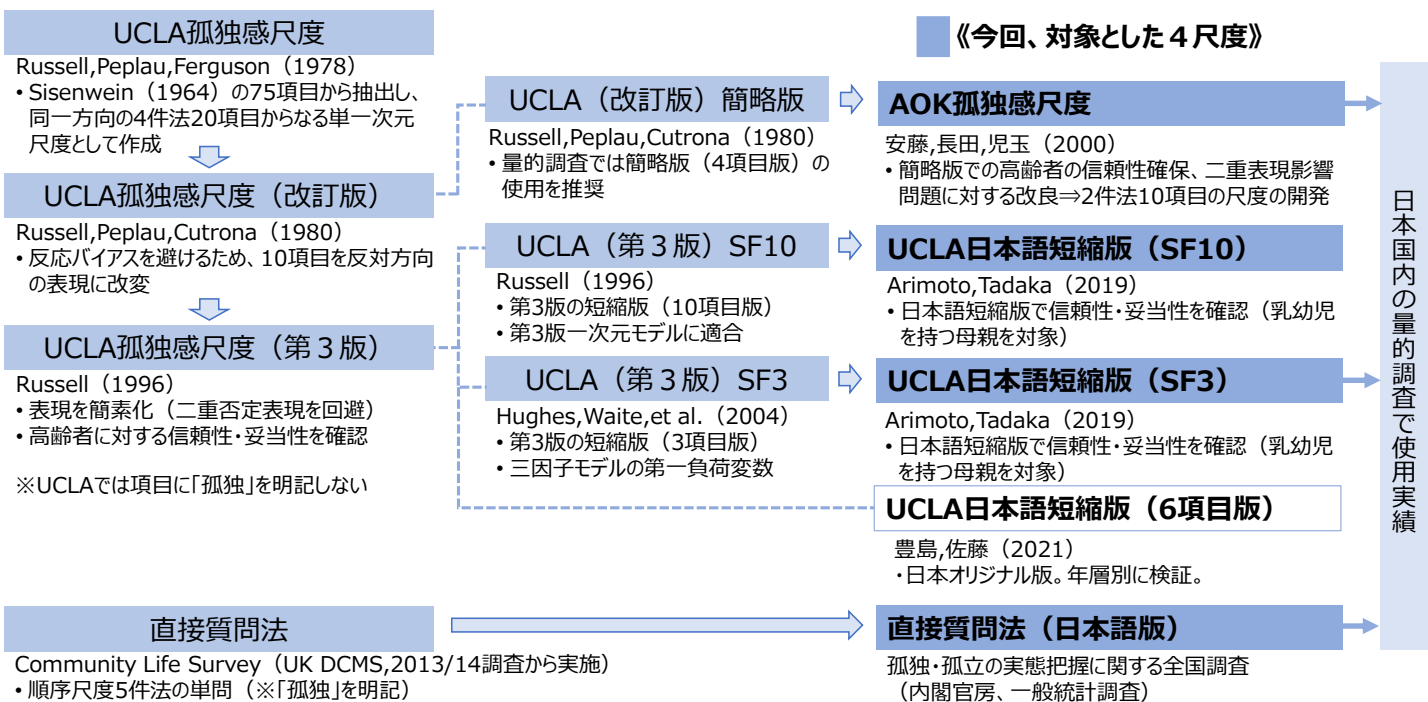
調査内容		
区分		調査内容
孤独感		・ UCLA孤独感尺度短縮版（SF-10）による孤独感 ・ UCLA孤独感尺度短縮版（SF-3）による孤独感 ・ AOK孤独感尺度による孤独感 ・ 直接質問法による孤独感
主観的ウェルビーイング・精神状態		・ 生活満足度（キャントリルラダー方式） ・ ソーシャルネットワーク満足度（キャントリルラダー方式） ・ 仕事の主観的パフォーマンス評価（キャントリルラダー方式） ・ 精神状態（WHO-5、K6） ・ 認知的居場所
属性等	本人の状態（人間資本）	・ 性別、年齢 ・ 学歴、職業・就業状態 ・ 健康状態
	経済の状態（経済資本）	・ 世帯年収、経済的余裕 ・ 住宅（持家・賃貸）
	社会関係の状態（社会関係資本）	・ 配偶関係、世帯構成 ・ ソーシャルネットワーク（LSNS-6） ・ 交流頻度（LSNS-12の交流頻度改変）、社会活動頻度 ・ SNS利用
生活行動		・ 外出頻度、外出目的 ・ 日常の行動範囲
居住環境		・ 居住地 ・ 住居形態
回答拒否感（セルフスティグマ検討用質問）		・ 調査で答えられなかった質問

※ 質問の順番は、キャリアオーバー効果の抑制を考慮して設定しており、上表の順番とは異なる（巻末資料を参照）

II. 調査研究の方法

3. 対象とした孤独感尺度

- 孤独感尺度は単一次元尺度と類型尺度に分けられる。本研究で対象とする尺度は、孤独感の強度を純粹に示す単一次元尺度にしぼった。
- 単一次元尺度のうち、日本国内の量的調査（尺度開発のための調査を除く）において使用実績が確認された尺度を選定した。それらはUCLA孤独感尺度短縮版（3項目版：UCLA-SF3）とAOK孤独感尺度である。
- なお、UCLA孤独感尺度（フルバージョン：20項目）の使用実績も多数確認されるが、他の孤独感尺度と重ねてフルバージョンの20項目を聞く場合、回答者負担が大きくなり、また、キャリーオーバー効果の増幅の可能性も懸念される。そこで本研究においては20項目版との適合が確認されている短縮版（10項目版：UCLA-SF10）をその代用として使用することとした。
- UCLA-SF3とともに、「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査」（一般統計調査）で使用されてきた質問も対象に追加した。この質問はUCLA孤独感尺度やAOK孤独感尺度のような心理測定尺度として開発された孤独感尺度ではないが、本研究においてはこの質問も独自に孤独感尺度として扱うことにした（以下「直接質問法」という）。
- 参考として各尺度の系譜を以下に示す。また、次頁に各尺度に使用される質問項目を示す。系譜をみると国内で使用されている尺度はすべて海外にルーツがあることがわかる。また、参照尺度や開発時期に違いがあることも見えてくる。



II. 調査研究の方法

3. 対象とした孤独感尺度(詳細)

- UCLA孤独感尺度では、20項目の孤独関連項目を並べ、各項目を感じる頻度を4件法で測定したうえで、項目ごとにスコア化し、そのスコアを積算して総合スコアを求める。短縮版のSF-10では10項目、SF-3では3項目で測定する。
- AOK孤独感尺度では、10項目の孤独関連項目を並べ、各項目を該当か非該当かの2件法（提示する選択肢は個別に異なる）で測定したうえで、項目ごとにスコア化し、そのスコアを積算して総合スコアを求める。
- UCLA孤独感尺度、AOK孤独感尺度ともに、スコアが高いほど孤独感が強いことを意味する。いずれの孤独感尺度でも、孤独か否かを判定するカットオフスコアに定まった見解はない。また、いずれの尺度でも「孤独」という言葉は使用されておらず、あくまでも孤独関連項目から間接的に孤独を測定する方法がとられている。これはセルフスティグマの影響の回避のためである。

UCLA孤独感尺度短縮版 (UCLA-SF10・UCLA-SF3)

UCLA孤独感尺度20項目版 (第3版 : 1996)	SF-10	SF3
▲ ① 自分は周りの人たちの中になじんでいると感じますか		
○ ② 自分には人との付き合いがないと感じることがありますか	○	○
○ ③ 自分には頼れる人が誰もいないと感じることがありますか		
○ ④ 自分はひとりぼっちだと感じる場合がありますか		
▲ ⑤ 自分は友人や仲間のグループの一員だと感じる場合がありますか		
▲ ⑥ 自分は周りの人たちと共通点が多いと感じることがありますか	○	
○ ⑦ 自分は誰とも親しくしていないと感じることはありますか		
○ ⑧ 自分の関心や考えは周りの人たちにはわからないと感じることがありますか		
▲ ⑨ 自分を社会的で親しみやすいと感じますか		
▲ ⑩ 自分には親しい人たちがいると感じますか	○	
○ ⑪ 自分は取り残されていると感じることがありますか	○	○
○ ⑫ 他人との関わりは意味がないと感じることがありますか		
○ ⑬ 自分を本当によく知っている人は誰もいないと感じることはありますか	○	
○ ⑭ 自分は他の人たちから孤立していると感じることはありますか	○	○
▲ ⑮ 希望すれば自分と気の合う仲間が見つかると感じますか		
▲ ⑯ 自分を本当に理解している人がいると感じますか	○	
○ ⑰ 自分は内気であると感じますか		
○ ⑱ 周りの人たちと一体感がもてないと感じることがありますか	○	
▲ ⑲ 話し相手がいると感じますか	○	
▲ ⑳ 頼れる人がいると感じますか	○	

選択肢・スコア

選択肢→ (4件法)	決して ない	ほと んど ない	時々 ある	常に ある
スコア→	○	1	2	3
	▲	4	3	2
			4	1

UCLA-SF3

各項目につき1点～4点でスコア化し、3項目の合計を求める
⇒UCLA-SF3スコア：3点～12点
点数が高いほど孤独感が強い

UCLA-SF10

各項目につき1点～4点でスコア化し、10項目の合計を求める
⇒UCLA-SF10スコア：10点～40点
点数が高いほど孤独感が強い

※SF3・SF10とも「孤独」判定のカットオフスコアは定まってない

AOK孤独感尺度

質問 「次の①～⑩の各項目について、あなたご自身に該当するほうをお答えください」	回答選択肢 (2件法)		スコア		UCLAとの対応		
					第3版	SF10	SF3
① あなたはまわりの人たちとうまくいっていると思いますか	そう思う	そう思わない	0	1	①		
② あなたは人とのつきあいがいいほうですか	ないほうだ	あるほうだ	1	0	②	○	○
③ あなたには親しくしている人がいますか	いる	いない	0	1	⑩	○	
④ あなたのことを本当によくわかってくれる人はいないと思いますか	いないと思う	いると思う	1	0	⑬	○	
⑤ あなたは何かをやろうとした時、一緒にできる人はいますか	いる	いない	0	1			
⑥ あなたは他の人から孤立しているように思いますか	そう思う	そう思わない	1	0	⑭	○	○
⑦ あなたのことを本当に理解している人はいますか	いる	いない	0	1	⑯	○	
⑧ あなたはひとりぼっちと感じますか	感じる	感じない	1	0	④		
⑨ あなたのまわりには心の通じ合う人がいますか	いる	いない	0	1			
⑩ あなたには話し相手がありますか	いる	いない	0	1	⑲	○	
自分は取り残されていると感じることがありますか					⑪	○	○
自分は周りの人たちと共通点が多いと感じることがありますか					⑥	○	
周りの人たちと一体感がもてないと感じることがありますか					⑱	○	
頼れる人がいると感じますか					⑳	○	
自分には頼れる人が誰もいないと感じることがありますか					③		
自分は友人や仲間のグループの一員だと感じる場合がありますか					⑤		
自分は誰とも親しくしていないと感じることはありますか					⑦		
自分の関心や考えは周りの人たちにはわからないと感じることがありますか					⑧		
自分を社会的で親しみやすいと感じますか					⑨		
他人との関わりは意味がないと感じることがありますか					⑫		
希望すれば自分と気の合う仲間が見つかると感じますか					⑮		
自分は内気であると感じますか					⑰		

各項目につき0点か1点でスコア化し、10項目の合計を求める
⇒AOKスコア：0点～10点
点数が高いほど孤独感が強い

※「孤独」判定のカットオフスコアは定まってない

Ⅱ. 調査研究の方法

3. 対象とした孤独感尺度(詳細)

- 直接質問法は心理測定尺度ではない。英国の社会調査“Community Life Survey”で導入された質問であり、「孤独」を明記して直接的に孤独を感じる頻度を聞くことから“Direct measure”と呼ばれている。
- 日本の「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査」（一般統計調査）では、これが日本語に訳されてUCLA-SF3とともに使用されている。
- 直接質問法は5件法で孤独感が測定されているが、元来心理測定尺度ではなく、定まった換算スコアがない。そこで、本研究では比較分析に向けて独自にスコア化した。本研究における換算スコアは以下に示す通りである。

直接質問法

GSS harmonised questions on different aspects of loneliness were included in the survey.

1. How often do you feel lonely? (direct measure)

Often or Always
Some of the time
Occasionally
Hardly ever
Never



(日本語版)

あなたはどの程度、孤独であると感じることがありますか。

1. 決してない
2. ほとんどない
3. たまにある
4. 時々ある
5. しばしばある・常にある

(内閣官房「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査」本調査)
※本調査ではこのまま「直接質問法」として使用

本分析での尺度化



UCLA-SF3 (CLS版・日本語版) 選択肢→回答スコア		選択肢→回答 スコア
Hardly ever or never→1	決してない→1 ほとんどない→2	決してない→1 ほとんどない→2
Some of the time→2	時々ある→3	たまにある→3 時々ある→4
Often→3	常にある→4	しばしばある・ 常にある→5



本分析ではこの回答スコアをそのまま直接質問法の孤独感スコアとする
(直接質問法を独自にスコア化した「孤独感尺度」として使用)

(Gov.UK Government Statistical Service)

Ⅲ. 分析結果

1. 基礎的分析(データの確認)

1-1. 尺度の信頼性

- 本調査の各尺度で測定した結果が、孤独感スコアとして信頼できるものであるかを確認するため、各尺度についてCronbachのα係数を求めた。結果は下表に示す通りであり、回収サンプル全体では十分に高い係数が得られた。
- 孤独感尺度の開発過程では、高齢者で信頼性が得られないケースも指摘されてきた。本研究で対象にした孤独感尺度はいずれも開発過程で信頼性が検証されてきたものだが、各尺度の開発過程を鑑み、高齢者（60-74歳）にしばったα係数も求めた。その結果、高齢者でも高い係数が得られ、孤独感尺度としての分析が可能であると判断された。なお、UCLA-SF3のα係数は0.75であり、十分に高いと断定するには慎重さも要する水準であったことを付言しておく。
- 検証に用いる尺度（LSNS-6、WHO-5、K6）、セルフスティグマの影響の把握に用いる質問群（回答拒否感）についてもα係数を求めた。その結果、いずれの尺度、質問群においても尺度としての信頼性が確認された。

Cronbach α

$$\alpha = \frac{m}{m-1} \left(1 - \frac{\sum_{i=1}^m \sigma_i^2}{\sigma_x^2} \right)$$

m : 質問数

σ_i^2 : 各質問のスコアの分散

σ_x^2 : 各質問の合計スコアの分散



質問群	質問数	α係数	
		全体	60-74歳
n		1000	271
UCLA-SF10	10	0.858	0.876
UCLA-SF3	3	0.805	0.753
AOK	10	0.884	0.883
LSNS-6	6	0.864	0.858
WHO-5	5	0.909	0.899
K6	6	0.927	0.890
回答拒否感 (UCLA-SF10)	10	0.929	0.939
回答拒否感 (UCLA-SF3)	3	0.812	0.887
回答拒否感 (AOK)	10	0.932	0.946
回答拒否感 (LSNS-6)	6	0.869	0.878
回答拒否感 (WHO-5)	5	0.884	0.933
回答拒否感 (K6)	6	0.894	0.898

※直接質問は単問尺度であり信頼性検証は不要（係数算出式にも該当しない）

※「回答拒否感」は、調査で答えたくなかった質問数（巻末資料：調査票を参照）

Ⅲ. 分析結果

2. 属性バイアス

2-1. 属性別孤独感スコアの尺度間比較

① 分析方法・手順

- 各孤独感尺度において孤独の判定スコアが定まっていないため、判定スコアをもとに孤独者を特定し、孤独者の出現率や孤独者の属性別構成比を尺度間で比較するアプローチはとれない。そこで、各属性の平均的な孤独感強度の尺度間比較によって属性バイアスを把握することとした。比較にあたっては全40の属性（性別2層、年齢別4層、最終学歴別2層、職業別7層、健康状態別3層、世帯年収別5層、住居別2層、婚姻状況別2層、世帯類型別2層、ソーシャルネットワーク別2層、交流有無別2層、居住地の人口規模別4層、住居形態別2層）の孤独感を求めた。
- なお、尺度間で孤独感スコアのレンジが異なるため、尺度間の比較に向けて各尺度のスコアを標準化した（標準化は z 値への換算により行っている）。その上で属性別に標準化した孤独感スコア（ z 値）の平均値を求め、尺度間で統計的に有意な差があるかを分散分析で確認した（反復測定一元配置分散分析）。有意な差があることが確認された場合には多重比較（Dunnett検定）により、UCLA-SF10（本研究でフルバージョンのUCLA孤独感尺度に代用している尺度）と比較した場合に有意な差があるかを確認した。

各孤独感尺度の スコアレンジ	UCLA-SF10	10点～40点
	UCLA-SF3	3点～12点
	AOK	0点～10点
	直接質問法	1点～5点

- 結果は、次頁の表の通りである。なお、次頁の表内には標準化した孤独感スコア（ z 値）を示してある。よって、どの孤独感尺度においても回答者全体の平均値は0に調整されている。孤独感が全体平均よりも強い場合は「+」の値をとり、孤独感が強いほど数値が大きくなる。孤独感が全体平均よりも弱い場合は「-」の値をとり、弱いほど数値はマイナス方向に大きくなる。孤独感が全体平均よりも強い「+」の値は赤色で示してある。また、分散分析・多重比較の結果（有意水準5%）で有意な差があった場合には該当欄をピンク色で示してある。

② 分析結果

- 性別では、男性の孤独感スコア、女性の孤独感スコアともに尺度間で有意な差があることが確認された。UCLA-SF10と比較した場合、男性、女性ともUCLA-SF3及び直接質問法で有意な差があった。
- 年齢別では、45-59歳の孤独感スコアに尺度間で有意な差があることが確認された。
- 職業では、学生・生徒の孤独感スコアに尺度間で有意な差があることが確認された。
- 世帯類型では、単身の孤独感スコアに尺度間で有意な差があることが確認された。
- ソーシャルネットワーク状態では、社会的孤立層の孤独感スコア、非孤立層の孤独感スコアともに尺度間で有意な差があることが確認された。
- 交流有無別では、交流なし層の孤独感スコア、交流あり層の孤独感スコアともに尺度間で有意な差があることが確認された。
- 以上、孤独感スコアに尺度間で有意な差が確認されたのは、全40属性のうち9属性であった。全体的には尺度間で孤独感スコアに有意な差が確認された属性は少数にとどまっており、各尺度の測定機能には一定の同等性が確認できる。
- ただし、男性、女性、社会関係状態を示す属性の孤独感スコアには尺度間で有意な差がみられ、しかも、UCLA-SF3と直接質問法で反応が弱めに現れていることが共通に確認された。

Ⅲ. 分析結果

2. 属性バイアス

2-1. 属性別孤独感スコアの尺度間比較

区分		属性・状態	n	UCLA-SF10	UCLA-SF3	AOK	直接質問法	p
本人状態	性別	男性	498	0.145	0.035**	0.156	0.021**	***
		女性	502	-0.144	-0.035**	-0.155	-0.021***	***
	年齢	15-29 歳	194	-0.033	0.006	-0.083	0.027	
		30-44 歳	246	0.122	0.122	0.032	0.106	
		45-59 歳	289	0.182	0.146	0.239	0.085	*
		60-74 歳	271	-0.282	-0.271	-0.225	-0.206	
	最終学歴	中等教育※1	418	0.013	0.004	0.036	0.024	
		高等教育	582	-0.009	-0.003	-0.026	-0.017	
	職業	正規雇用	412	0.046	-0.005	0.028	-0.040	
		非正規雇用	199	-0.069	-0.035	-0.037	0.045	
		役員	16	0.012	-0.123	0.217	0.100	
		自営業	87	0.032	0.020	0.018	0.098	
		内職	6	-0.050	0.357	0.023	0.211	
		学生・生徒	29	-0.203	0.077	-0.399	-0.004	*
		就業していない（求職中）	34	0.378	0.277	0.169	0.315	
		就業していない（求職していない）	217	-0.013	-0.010	-0.006	-0.011	
	健康状態	よくない	178	0.518	0.502	0.584	0.600	
		ふつう	351	0.125	0.113	0.124	0.064	
		よい	471	-0.289	-0.274	-0.313	-0.274	
経済状態	世帯収入	100 万円未満	75	0.294	0.182	0.352	0.175	
		100～300 万円未満	188	0.194	0.172	0.218	0.220	
		300～500 万円未満	288	-0.075	-0.052	-0.066	-0.076	
		500～1000 万円未満	332	-0.059	-0.063	-0.099	-0.049	
		1000 万円以上	117	-0.146	-0.087	-0.129	-0.139	
	住居	借家	335	0.123	0.124	0.048	0.110	
		持ち家	665	-0.062	-0.062	-0.024	-0.055	
社会関係状態	婚姻状況	未婚	334	0.351	0.283	0.346	0.322	
		既婚※2	666	-0.176	-0.142	-0.173	-0.162	
	世帯	単身	214	0.252	0.146	0.279	0.190	*
		二人以上	786	-0.069	-0.040	-0.076	-0.052	
	ソーシャルネットワーク	社会的孤立※3	580	0.401	0.285**	0.429	0.255***	***
		非孤立	420	-0.553	-0.394***	-0.593	-0.352***	***
居住環境	交流	交流なし※4	170	0.591	0.402*	0.720	0.393*	***
		交流あり	830	-0.121	-0.082	-0.147	-0.081	*
	人口規模	10 万人未満	222	0.110	0.150	0.091	0.014	†
		10 万人以上	146	0.003	-0.048	0.057	-0.033	
		20 万人以上（大都市除く）	243	0.021	-0.016	-0.003	0.020	
	住居形態	大都市※5	389	-0.077	-0.057	-0.071	-0.009	
		共同住宅	463	0.054	0.054	0.000	0.047	
		一戸建て	537	-0.047	-0.046	0.000	-0.041	

、**、*、†：各属性における孤独感尺度別の孤独感（z 値）の平均値の差の検定結果。：p<0.001、**：p<0.01 *：p<0.05、†：p<0.1。
p（anova）欄は反復測定一元配置分散分析の結果。UCLA3、AOK、直接質問の各欄は UCLA10 との差の多重比較結果（Dunnnett 検定）。多重比較は反復測定一元配置分散分析で p<0.05 となった属性のみで実施。

※1：専門学校を含む（高等教育では専門学校を除く）

※2：離死別を含む

※3：LSNS-6 で社会的孤立に相当する者（score<12。LSNS-6 では関係者の有無・人数で孤立を測定）

※4：家族・親族との交流が月 1 回未満かつ、友人との交流が月 1 回未満（LSNS-12 の交流頻度で配点 0 に対応するカテゴリー区分を使用）。社会的孤立がストック的側面（人数）を示す変数であるのに対し、交流はフロー的な側面（回数）を示す変数。

※5：政令指定都市・特別区

Ⅲ. 分析結果

2. 属性バイアス

2-2. 孤独感スコア説明モデルの尺度間比較

① 分析方法・手順

- 前項では属性ごとに個別に孤独感尺度による差異を確認した。ここでは、前項で取り上げた属性を説明変数とした孤独感スコアの説明モデル（重回帰モデル）を尺度ごとに求める。モデルの相対比較を通じて、孤独感スコアへの属性変数の寄与度の違い等を把握する。
- なお、説明変数については、前項で z 値が「+」であった属性（回答者全体の平均値よりも孤独感が強い属性）に注目し、属性種目別にすべて2項に括ってから「+」属性をダミー変数化した上で強制投入した。
- 尺度間でモデルを比較するため、偏回帰係数には標準化係数（ β ）を用いた。なお、投入する一部の属性変数間に一定の相関も想定されることから多重共線性のチェックを行った。

② 分析結果

- モデルの説明力（ R^2 ）は、UCLA-SF10とAOKで0.3台、UCLA-SF3と直接質問法で0.2前後となっている。有意となった説明変数（有意水準5%）を概観すると、UCLA-SF10、AOK、UCLA-SF3、直接質問法の順で多かった。
- 個別の説明変数に視線を向けると、いずれのモデルでも「社会的孤立」の係数が最も大きくなっていた。ただし、この係数の水準にはモデル間に大きな差があることも確認された。UCLA-SF10及びAOKではこの係数が0.4に迫っており、他の属性変数よりも突出して大きくなっているのに対し、UCLA-SF3及び直接質問法では0.2台にとどまっており、他の変数に比べて突出した傾向も確認されなかった。
- 「交流なし」「男性」でもモデル間でやや大きめの差が確認された。いずれもUCLA-SF3及び直接質問法で係数が小さくなっていた。UCLA-SF3や直接質問法ではUCLA-SF10やAOKに比べて、これらの属性の孤独感を感度よくとらえていない可能性も想定される。

		標準化係数（ β ）				VIF
		UCLA10	UCLA3	AOK	直接	UCLA10～ 直接
調整済 R^2		0.338	0.205	0.383	0.181	
本人 状態	性別（→男性）	0.094**	-0.010	0.100**	-0.026	1.061
	年齢（→ミドル世代※1）	0.140**	0.128**	0.123**	0.085**	1.076
	最終学歴（→中等教育※2）	-0.032	-0.043	-0.018	-0.018	1.067
	就業状態（→求職中※3）	0.063*	0.040	0.023	0.046	1.024
	就業形態（→非雇用型就労※4）	-0.008	-0.001	-0.008	0.035	1.032
	健康状態（→健康ではない※5）	0.179**	0.195**	0.197**	0.205**	1.046
経済 状態	世帯収入（→低所得※6）	0.060*	0.048	0.072**	0.058†	1.155
	住居（→賃貸）	0.025	0.049	-0.017	0.038	1.808
社会 関係	婚姻状況（→未婚）	0.191**	0.187**	0.168**	0.211**	1.363
	世帯（→単身）	-0.039	-0.077*	0.004	-0.061†	1.633
	ソーシャルネットワーク（→社会的孤立）	0.377**	0.260**	0.391**	0.219**	1.146
	交流（→なし）	0.090**	0.053†	0.147**	0.061*	1.146
居住 環境	人口規模（→小都市※7）	0.064*	0.088**	0.039	0.004	1.102
	住居形態（→共同住宅）	-0.001	0.012	-0.048	-0.009	1.862

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$ † : $p < 0.1$

※ 説明変数は全てダミー変数（2値に括ってからダミー変数化している。就業状態については、就業状況と就業形態の2つの視点でそれぞれ変数化した）。

※ 本分析での操作変数は以下の通り。

※1 ミドル世代：「30-44歳」及び「45-59歳」

※2 中等教育：専門学校を含む（高等教育は専門学校を除く）

※3 求職中：「就業していない（求職中）」

※4 非雇用型就労：性質は異なるが「役員」「自営業」「内職」を非雇用型就労として一つに括った

※5 健康ではない：主観的健康感が「ふつう」もしくは「よくない（あまりよくない・よくない）」

※6 低所得：世帯年収300万円未満の各収入階層

※7 小都市：人口10万人未満（2020年国勢調査）の市町村

Ⅲ. 分析結果

3. 精神状態や主観的Well-Beingの説明力

3-1. 精神状態説明モデルの尺度間比較

①分析方法・手順

- 孤独は精神状態や主観的Well-Beingにも影響を及ぼすことが広く知られている。そこで精神状態・主観的Well-Beingを各尺度による孤独感スコアで説明するモデルを求め、モデル間の比較を行う。
- 精神状態を示す尺度にはK6及びWHO-5を取り上げる（Ⅱ-2参照）。まず、属性を説明変数としたK6の説明モデル、WHO-5の説明モデルを求める。これを基礎モデルと位置付けたうえで、各孤独感尺度による孤独感スコア変数を追加投入し、基礎モデルに対する追加投入の効果を比較する。なお、属性変数には前項で使用した変数を用いる。

②分析結果

- K6の基礎モデルをみると、 R^2 は0.2となっている。UCLA-SF10の孤独感スコアを追加投入したモデル及びAOKの孤独感スコアを追加投入したモデルでは R^2 が0.2台後半に改善している。UCLA-SF3の孤独感スコアを追加投入したモデル及び直接質問法の孤独感スコアを追加投入したモデルでは R^2 が0.3台に改善している。孤独感スコアの係数は直接質問法（0.43）、UCLA-SF3（0.39）でUCLA-SF10及びAOKに比べて大きくなっている。
- 各尺度による孤独感スコアを追加投入すると、いずれのモデルでも基礎モデルに対して「健康ではない」「社会的孤立」「交流なし」の係数が小さくなっている。しかしながら、投入後の各モデルにおけるこれらの属性の係数は概ね同水準となっているため、追加投入した孤独感スコアの係数の大きさの違いがモデルの説明力の違いに現れる結果となっている。

K6の説明モデル						
		標準化係数 (β)				
		基礎	UCLA10	UCLA3	AOK	直接
調整済R ²		0.202	0.286	0.325	0.279	0.354
本人状態	性別 (→男性)	-0.004	-0.038	0.000	-0.040	0.007
	年齢 (→ミドル世代)	0.068*	0.018	0.018	0.025	0.032
	最終学歴 (→中等教育)	0.020	0.031	0.037	0.026	0.028
	就業状態 (→求職中)	0.055†	0.033	0.040	0.047†	0.036
	就業形態 (→非雇用型就労)	-0.033	-0.030	-0.032	-0.030	-0.048†
	健康状態 (→健康ではない)	0.301**	0.237**	0.224**	0.231**	0.212**
経済状態	世帯収入 (→低所得)	0.054†	0.033	0.036	0.029	0.029
	住居 (→賃貸)	0.117**	0.108**	0.098**	0.123**	0.101**
社会関係状態	婚姻状況 (→未婚)	0.161**	0.092**	0.087**	0.101**	0.069*
	世帯 (→単身)	-0.043	-0.030	-0.013	-0.045	-0.017
	ソーシャルネットワーク(→社会的孤立)	0.122**	-0.013	0.020	-0.017	0.028
	交流 (→なし)	0.098**	0.066*	0.077**	0.046	0.072**
居住環境	人口規模 (→小都市)	0.052†	0.029	0.017	0.038	0.050†
	住居形態 (→共同住宅)	-0.044	-0.043	-0.048	-0.027	-0.040
孤独感スコア	UCLA10		0.358**			
	UCLA3			0.394**		
	AOK				0.355**	
	直接質問法					0.431**

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$ † : $p < 0.1$

Ⅲ. 分析結果

3. 精神状態や主観的Well-Beingの説明力

3-1. 精神状態説明モデルの尺度間比較

③分析結果（その2）

- 前頁②のK6と同様にWHO-5の説明モデルを確認する。なお、K6が精神的抑うつ状態を示すのに対し、WHO-5は精神的健康状態を示す。同じ属性変数を投入した回帰分析では各属性変数の係数の符号が概ね逆転することが想定される。どちらも精神疾患のスクリーニング等にも使用される尺度である。
- WHO-5の基礎モデルをみると、 R^2 は0.26となっている。各孤独感尺度による孤独感スコアを投入すると、いずれのモデルでも R^2 が0.3以上に改善するが、モデル間で改善度に大きな差はみられない。
- AOKの孤独感スコアを投入したモデルでは、基礎モデルで有意（有意水準：5%）であった「社会的孤立」「交流なし」の係数は有意な水準を保っておらず、また、UCLA-SF10でも「社会的孤立」の係数は有意な水準を保っていない。この点でUCLA-SF3及び直接質問法との違いが鮮明に現れている。UCLA-SF10のスコア及びAOKのスコアは認知的社会関係と精神的健康状態の間では交絡因子として機能している可能性がある。

WHO-5の説明モデル						
		標準化係数 (β)				
		基礎	UCLA10	UCLA3	AOK	直接
調整済R ²		0.263	0.336	0.322	0.344	0.343
本人状態	性別 (→男性)	0.000	0.031	-0.003	0.036	-0.008
	年齢 (→ミドル世代)	-0.111**	-0.064*	-0.076**	-0.066*	-0.084**
	最終学歴 (→中等教育)	-0.015	-0.026	-0.027	-0.022	-0.021
	就業状態 (→求職中)	-0.006	0.015	0.005	0.002	0.008
	就業形態 (→非雇用型就労)	0.025	0.022	0.025	0.022	0.036
	健康状態 (→健康ではない)	-0.385**	-0.325**	-0.331**	-0.313**	-0.320**
経済状態	世帯収入 (→低所得)	-0.035	-0.015	-0.022	-0.009	-0.017
	住居 (→賃貸)	-0.046	-0.038	-0.033	-0.052	-0.034
社会関係状態	婚姻状況 (→未婚)	-0.058†	0.006	-0.006	0.003	0.009
	世帯 (→単身)	-0.014	-0.027	-0.036	-0.013	-0.034
	ソーシャルネットワーク(→社会的孤立)	-0.185**	-0.059†	-0.114**	-0.043	-0.116**
	交流 (→なし)	-0.096**	-0.066*	-0.082**	-0.043	-0.077**
居住環境	人口規模 (→小都市)	-0.006	0.016	0.018	0.008	-0.004
	住居形態 (→共同住宅)	0.039	0.039	0.042	0.021	0.036
孤独感スコア	UCLA10		-0.334**			
	UCLA3			-0.274**		
	AOK				-0.363**	
	直接質問法					-0.314**

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$ † : $p < 0.1$

Ⅲ. 分析結果

3. 精神状態や主観的Well-Beingの説明力

3-2. 主観的Well-Being説明モデルの尺度間比較

①分析方法・手順

- 前項の精神状態と同様に、主観的Well-Beingの説明モデルへの各孤独感尺度による孤独感スコアの投入効果の差異をみる。主観的Well-Beingの尺度では生活満足度、ソーシャルネットワーク満足度（人とのつながりの満足度）を取り上げる。なお、どちらもキャントリルラダー方式（最悪の状態：0点～最良の状態：10点）で測定している。

②分析結果

- 生活満足度の基礎モデル、ソーシャルネットワーク満足度の基礎モデルをみると、いずれもR²は0.2程度となっている。各孤独感尺度による孤独感スコアを追加投入すると、いずれのモデルでもR²が0.3程度に改善する。なお、モデル間で改善度に大きな差はみられない。
- 各モデルの説明変数に注目すると、生活満足度、ソーシャルネットワーク満足度の各基礎モデルでは、社会関係属性で有意に効いている変数がある（有意水準：5%）。UCLA-SF3の孤独感スコアを追加投入したモデル、直接質問法の孤独感スコアを追加投入したモデルでもそれらの変数の係数は統計的に有意な水準を保っている。他方、UCLA-SF10の孤独感スコア、AOKの孤独感スコアを投入したモデルでは、それらの変数の係数の統計的な意味は失われている。UCLA-SF10のスコア・AOKのスコアが交絡因子として機能している可能性がうかがわれる。

生活満足度の説明モデル						
		標準化係数 (β)				
		基礎	UCLA10	UCLA3	AOK	直接
調整済R ²		0.224	0.284	0.272	0.289	0.285
本人状態	性別 (→男性)	-0.075**	-0.047 [†]	-0.078**	-0.043	-0.083**
	年齢 (→ミドル世代)	-0.102**	-0.060*	-0.070*	-0.062*	-0.079**
	最終学歴 (→中等教育)	-0.061*	-0.071*	-0.071*	-0.067*	-0.066*
	就業状態 (→求職中)	-0.065*	-0.046 [†]	-0.055*	-0.057*	-0.052 [†]
	就業形態 (→非雇用型就労)	-0.019	-0.021	-0.019	-0.022	-0.009
	健康状態 (→健康ではない)	-0.305**	-0.251**	-0.257**	-0.241**	-0.249**
経済状態	世帯収入 (→低所得)	-0.070*	-0.051 [†]	-0.058*	-0.046	-0.054 [†]
	住居 (→賃貸)	-0.062 [†]	-0.055	-0.050	-0.068 [†]	-0.052
社会関係状態	婚姻状況 (→未婚)	-0.110**	-0.052	-0.063*	-0.055 [†]	-0.052
	世帯 (→単身)	0.002	-0.010	-0.017	0.003	-0.015
	ソーシャルネットワーク(→社会的孤立)	-0.166**	-0.051	-0.101**	-0.037	-0.105**
	交流 (→なし)	-0.049 [†]	-0.022	-0.036	-0.001	-0.033
居住環境	人口規模 (→小都市)	-0.065*	-0.045	-0.043	-0.052 [†]	-0.064*
	住居形態 (→共同住宅)	0.048	0.048	0.051	0.032	0.045
孤独感スコア	UCLA10		-0.304**			
	UCLA3			-0.249**		
	AOK				-0.328**	
	直接質問法					-0.275**

ソーシャルネットワーク満足度の説明モデル						
		標準化係数 (β)				
		基礎	UCLA10	UCLA3	AOK	直接
調整済R ²		0.196	0.323	0.309	0.292	0.296
本人状態	性別 (→男性)	-0.079**	-0.038	-0.083**	-0.040	-0.089**
	年齢 (→ミドル世代)	-0.099**	-0.038	-0.051 [†]	-0.050 [†]	-0.070*
	最終学歴 (→中等教育)	-0.024	-0.038	-0.040	-0.031	-0.031
	就業状態 (→求職中)	-0.084**	-0.056*	-0.069*	-0.075**	-0.068*
	就業形態 (→非雇用型就労)	0.000	-0.003	0.000	-0.003	0.013
	健康状態 (→健康ではない)	-0.263**	-0.185**	-0.190**	-0.185**	-0.192**
経済状態	世帯収入 (→低所得)	-0.045	-0.018	-0.027	-0.016	-0.025
	住居 (→賃貸)	-0.004	0.006	0.014	-0.011	0.009
社会関係状態	婚姻状況 (→未婚)	-0.060 [†]	0.024	0.011	0.007	0.014
	世帯 (→単身)	0.030	0.013	0.001	0.032	0.009
	ソーシャルネットワーク(→社会的孤立)	-0.207**	-0.042	-0.109**	-0.052 [†]	-0.131**
	交流 (→なし)	-0.089**	-0.049 [†]	-0.069*	-0.031	-0.067*
居住環境	人口規模 (→小都市)	-0.036	-0.008	-0.003	-0.021	-0.035
	住居形態 (→共同住宅)	0.042	0.041	0.046	0.023	0.039
孤独感スコア	UCLA10		-0.439**			
	UCLA3			-0.378**		
	AOK				-0.396**	
	直接質問法					-0.350**

** : p<0.01 * : p<0.05 † : p<0.1

Ⅲ. 分析結果

4. 孤独のセルフスティグマの影響の検討

①分析方法・手順

- Ⅲ2-2で求めた尺度別の孤独感スコア説明モデルに対し、各孤独感スコアを構成する質問への回答拒否感を示す変数を追加投入し、投入効果の差異をみる。
- 回答拒否感は、下に示す「答えたくなかった質問」の回答データによって把握している。答えたくなかった質問に該当する項目に1点、該当しなかった項目に0点を与え、孤独感尺度別に合計してスコア化した。
- なお、回答拒否感は必ずしもセルフスティグマを直接的に示さない点には留意が必要である（例えば、面倒なので答えたくない、プライバシーに関わるので答えたくないといったケースも想定される）。試行的な調査であり、あくまでもセルフスティグマ検討用の変数として使用する。

今後の調査・分析の改善に向けてご協力ください。

Q27. このアンケートの質問のうち、あなたが答えたくなかった質問はありましたか。(1)～(6)のそれぞれについて、あてはまるものをすべて選んでください。

(4) あなたご自身の人との関わりの実感に関して、答えたくなかった質問

1. 「自分には人との付き合いがない」と感じる頻度
2. 「自分は周りの人たちと共通点が多い」と感じる頻度
3. 「自分には親しい人たちがいる」と感じる頻度
4. 「自分は取り残されている」と感じる頻度
5. 「自分のことを本当によく知っている人は誰もいない」と感じる頻度
6. 「自分は他の人たちから孤立している」と感じる頻度
7. 「自分を本当に理解している人がある」と感じる頻度
8. 「周りの人たちと一体感がもてない」と感じる頻度
9. 「話し相手がいる」と感じる頻度
10. 「頼れる人がある」と感じる頻度
11. 「孤独である」と感じる頻度
12. 特にない

(4) : UCLAと直接質問法の例

質問群	質問数	α係数	
		全体	60-74歳
n		1000	271
回答拒否感 (UCLA-SF10)	10	0.929	0.939
回答拒否感 (UCLA-SF3)	3	0.812	0.887
回答拒否感 (AOK)	10	0.932	0.946
回答拒否感 (LSNS-6)	6	0.869	0.878
回答拒否感 (WHO-5)	5	0.884	0.933
回答拒否感 (K6)	6	0.894	0.898

②分析結果

- いずれの孤独感尺度においても、回答拒否感の変数を追加投入すると説明モデルのR²が若干改善している。
- UCLA-SF10、UCLA-SF3、AOKでは各回答拒否感の係数が同じ水準となっているが、直接質問法では係数がやや小さく収まっている。なお、いずれのモデルでも回答拒否感の係数の符号は「+」であり、回答拒否感が強いほど孤独感も強い関係性が確認できる。

		標準化係数 (β)							
		UCLA10		UCLA3		AOK		直接	
調整済R2		0.338	0.362	0.205	0.227	0.383	0.407	0.181	0.190
本人状態	性別 (→男性)	0.094**	0.091**	-0.010	-0.010	0.100**	0.099**	-0.026	-0.024
	年齢 (→ミドル世代)	0.140**	0.138**	0.128**	0.126**	0.123**	0.121**	0.085**	0.083**
	最終学歴 (→中等教育)	-0.032	-0.022	-0.043	-0.036	-0.018	-0.008	-0.018	-0.012
	就業状態 (→求職中)	0.063*	0.062*	0.040	0.036	0.023	0.022	0.046	0.045
	就業形態 (→非雇用型就労)	-0.008	-0.015	-0.001	-0.006	-0.008	-0.013	0.035	0.035
経済状態	健康状態 (→健康ではない)	0.179**	0.168**	0.195**	0.185**	0.197**	0.186**	0.205**	0.198**
	世帯収入 (→低所得)	0.060*	0.054*	0.048	0.044	0.072**	0.067*	0.058†	0.053†
	住居 (→賃貸)	0.025	0.015	0.049	0.039	-0.017	-0.028	0.038	0.029
社会関係状態	婚姻状況 (→未婚)	0.191**	0.191**	0.187**	0.184**	0.168**	0.171**	0.211**	0.214**
	世帯 (→単身)	-0.039	-0.042	-0.077*	-0.077*	0.004	-0.002	-0.061†	-0.061†
	ソーシャルネットワーク(→社会的孤立)	0.377**	0.374**	0.260**	0.256**	0.391**	0.386**	0.219**	0.218**
居住環境	交流 (→なし)	0.090**	0.090**	0.053†	0.051†	0.147**	0.144**	0.061*	0.056†
	人口規模 (→小都市)	0.064*	0.065*	0.088**	0.090**	0.039	0.042	0.004	0.009
	住居形態 (→共同住宅)	-0.001	0.009	0.012	0.024	-0.048	-0.036	-0.009	0.004
セルフスティグマ検討用変数	回答拒否感 (UCLA10)		0.157**						
	回答拒否感 (UCLA3)			0.152**					
	回答拒否感 (AOK)					0.157**			
	回答拒否感 (直接)								0.096**

** : p<0.01 * : p<0.05 † : p<0.1

Ⅲ. 分析結果

4. 孤独のセルフスティグマの影響の検討

① 分析方法・手順

- セルフスティグマがある場合、アンケート調査の回答時間に影響が出る可能性も想定される。ここではアンケートの回答時間の説明モデルを用いて検討を行う。
- まず、「孤独のセルフスティグマが刺激されれば孤独感を測る質問に対して回答拒否感を抱く」を前提に「回答拒否感を抱けば（すぐに回答できず）アンケートの回答時間が長くなる」と想定した。その上で、属性を説明変数とする回答時間の説明モデルを作成し、これを基礎モデルとして、各尺度別に孤独感スコア、回答拒否感を追加投入した場合の投入効果を尺度間で比較することとした。

② 分析結果

- 基礎モデルの R^2 は0.041であった。回答拒否感を投入して R^2 が改善したのは直接質問法だけであり、また回答拒否感が統計的に有意（有意水準：5%）となったのも直接質問法だけであった。直接質問法における回答拒否感の係数の符号は「+」であり、回答拒否感が強いほどアンケート回答時間が長くなる関係が確認できる。なお、他の尺度の回答拒否感の係数の符号もすべて「+」であるが、係数は極めて0に近い値となっている。

アンケート回答時間（秒）の説明													
		標準化係数（ β ）											
		基礎	UCLA10			UCLA3			AOK			直接	
調整済 R^2		0.041	0.042	0.040	0.041	0.040	0.040	0.039	0.044	0.040	0.044	0.040	0.043
属性	女性	0.048	0.041	0.048	0.041	0.048	0.048	0.048	0.037	0.048	0.037	0.048	0.047
	年齢（歳）	0.181**	0.175**	0.180**	0.174**	0.182**	0.180**	0.181**	0.177**	0.180**	0.176**	0.181**	0.177**
	世帯人数（人）	0.069*	0.067*	0.069*	0.067*	0.069*	0.069*	0.069*	0.065*	0.069*	0.066*	0.069*	0.069*
	アンケート回数※	0.065*	0.064*	0.065*	0.064*	0.065*	0.065*	0.065*	0.064*	0.065*	0.064*	0.065*	0.065*
UCLA10	孤独感スコア		-0.046		-0.049								
	回答拒否感			0.006	0.016								
UCLA3	孤独感スコア					0.009		0.008					
	回答拒否感						0.007	0.005					
AOK	孤独感スコア								-0.067*		-0.071*		
	回答拒否感									0.005	0.020		
直接	孤独感スコア											0.000	-0.009
	回答拒否感												0.065*

※アンケート回数：最近1年間のアンケート回答回数（モニター調査以外も含む）

**： $p<0.01$ *： $p<0.05$ †： $p<0.1$

IV. まとめと今後の課題

分析結果（尺度の比較分析）結果のまとめ

● 尺度の信頼性

- 各尺度の信頼度は高い水準にあることが確認された。

● 孤独感スコアの分布

- 各尺度の孤独感スコアの分布の形状には大きな違いがみられた。ただし、高スコア（孤独感が強いほう）の分布の形状は概ね似通っていた。尺度間の相関も中程度以上と確認された。

● 属性バイアス（各属性の孤独感の尺度間差）

- 属性ごとに尺度間の差を見た場合、多くの属性では尺度間に有意な差は確認されなかった。孤独感の測定において各尺度が概ね同様に機能している側面が広く確認できた。
- 一方、性別（男性・女性）、社会関係に関する属性、一部の年齢層や職業においては尺度間で有意な差も確認された。性別、社会関係の属性ではUCLA-SF3・直接質問法でUCLA-SF10に対してスコアが控えめに現れた。

● 属性バイアス（孤独感説明モデルの尺度間差）

- 属性を説明変数とした各尺度の孤独感スコア説明モデルをみると、モデル間で偏回帰係数が同水準となった属性も多く確認された。一方、性別（男性・女性）、社会関係に関する属性等では、モデル間で偏回帰係数の水準が大幅に異なっていた。これらの係数はUCLA-SF10やAOKで大きな値となっていた。モデルの説明力の水準も異なっており、属性の係数、モデルの説明力とも尺度間に差異が確認できた。

● 精神状態や主観的Well-Beingの説明力

- K6スコアの説明モデル、WHO-5スコアの説明モデル、生活満足度の説明モデル、ソーシャルネットワーク満足度の説明モデルのいずれにおいても、孤独感スコアを追加投入することでモデルの説明力に改善がみられた。K6の説明モデルでは直接質問法の孤独感スコアを追加投入すると特に改善が大きくみられ、尺度間の違いが顕著であった。他方、WHO-5、生活満足度、ソーシャルネットワーク満足度の説明モデルでは、UCLA-SF10の孤独感スコア、あるいはAOKの孤独感スコアを投入すると一部の社会関係属性の係数の統計的有意が失われ、UCLA-SF10・AOKの孤独感スコアの交絡因子としての機能性もうかがわれた。

● セルフスティグマの検討

- 各尺度の孤独感スコア説明モデルに回答拒否感を追加投入すると、いずれの尺度のモデルでも若干の改善がみられた。また、いずれのモデルでも回答拒否感が強いほど孤独感が強い関係があった。アンケートの回答時間の説明モデルに各尺度の回答拒否感を追加投入すると直接質問法のモデルのみ説明力にわずかな改善がみられ、回答拒否感の係数も有意となった。



- 各孤独感尺度の測定機能は量的調査において概ね同様に発現されることが確認できた。
- 各年齢層の孤独感も概ね同様に測定されていることが確認できた。孤独感尺度の開発においては特定の年齢層（特に高齢層等）への注目・配慮が行われ、開発・改良が進められてきた経過がある。その成果もうかがわれる結果であった。他方、男性・女性における孤独感には尺度間における測定結果の差が確認された。量的調査においてはこのような差に現れる各尺度の特性も踏まえ上で尺度を選定・使用していくことが重要となる。また、尺度の開発・改良においては各性別への配慮の必要性もうかがわれる。
- 社会関係状態を示す属性の孤独感でも一部に尺度間における測定結果の差が見られた。特に「社会的孤立」「交流なし」で顕著であった。また、主観的Well-Beingに対して、UCLA-SF10及びAOKの孤独感スコアと「社会的交流」「交流なし」とが同義的に機能している可能性もうかがえた。その場合、「社会的孤立」「交流なし」に対応する認知的社会関係の性質もこれらの尺度では測定結果に反映されていることになる。UCLA-SF3や直接質問法の測定結果にそれらの性質が大きく反映されていないとすれば、尺度間で異なる概念範囲を測定していることとなる。その点に注目すると、UCLA-SF3や直接質問法のように項目数が少ない尺度ではより狭い概念範囲で孤独を測定している可能性があると考えられる。項目数をしぼった短縮版等の性質として当然の結果でもあるが、本調査では、それが認知的社会関係に顕在化したとみられる。
- セルフスティグマの影響の検討にあたって回答拒否感の分析結果をみると、「孤独」を直接的に聞く直接質問法と、「孤独」を間接的に把握するその他の尺度との間で大きな違いがみられた。回答時間との関係からみれば、直接質問法はセルフスティグマを刺激している可能性が高いと考えられる。より精緻な調査・分析が必要視される。

今後の課題

- 孤独感尺度の比較分析の結果、上記のようにいくつかの具体的な課題も浮かび上がった。今後、その課題に焦点化した分析が重要となる。
- 各尺度を構成する個別の質問、特定の回答傾向のサンプル群に焦点化した分析は未着手である（項目反応理論を用いた分析、カットオフスコアの探求等）。これらの分析も合わせて実施することが重要視される。このような分析が前述の課題の糸口となる可能性も想定される。

参考文献

- Aamir Ranjha, UCLA Loneliness Scale (updated on July 25, 2023) .
<https://psychologyroots.com/ucla-loneliness-scale/>
- Azusa Arimoto and Etsuko Tadaka (2019) Reliability and validity of Japanese versions of the UCLA loneliness scale version 3 for use among mothers with infants and toddlers: a cross-sectional study. BMC Women's Health.
<https://bmcwomenshealth.biomedcentral.com/articles/10.1186/s12905-019-0792-4>
- Chiyoung Lee, Belong Cho, Qing Yang, Sun Ju Chang, So-Im Ryu, Eun-Young Noh, and Yeon-Hwan Park (2021) A Psychometric Analysis of the 20-item Revised University of California Los Angeles Loneliness Scale Among Korean Older Adults Living Alone. Research in Gerontological Nursing, Vol. 14.
- Department for Digital, Culture, Media & Sports (2018) Community Life Survey Technical Report 2017/18.
- Department for Digital, Culture, Media & Sports (2019) Community Life Survey Technical Report 2018/19.
- Department for Digital, Culture, Media & Sports (2021) Community Life Survey Technical Report 2020/21.
- D Russell, L A Peplau, M L Ferguson (1978) Developing a measure of loneliness, Journal of Personality Assessment, Vol.42.
- D Russell, L Peplau, C Cutrona (1980) The Revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and Discriminant Validity Evidence. Journal of Personality and Social Psychology, 39 (3) .
- D W Russell (1996) UCLA Loneliness Scale (Version 3): reliability, validity, and factor structure. Journal of Personality Assessment, 66 (1) .
- Mary Elizabeth Hughes, Linda J Waite, Louise C Hawkey, John T Cacioppo (2004) A Short Scale for Measuring Loneliness in Large Surveys: Results From Two Population-Based Studies. Research Aging, 26 (6) .
- Timothy Matthews, Andrea Danese, Avshalom Caspi, Helen L Fisher, Sidra Goldman-Mellor, Agnieszka Kępa, Terrie E Moffitt, Candice L Odgers, Louise Arseneault (2018) Lonely young adults in modern Britain: Findings from an epidemiological cohort study, Psychological Medicine, 49.
- 安藤孝敏、長田久雄、児玉好信 (2000) 孤独感尺度の作成と中高年における孤独感の関連要因. 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ社会科学3.
- 安藤孝敏、小池高史、高橋知也 (2016) 都市部のひとり暮らし高齢者における孤独感の関連要因. 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ.
- ヴィヴェック・H・マーシー (樋口武志訳) (2023) 孤独の本質－つながりの力. 英治出版.
- 落合良行 (1983) 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成. 教育心理学研究31 (4) .
- 久保祥雄、杉岡隆 (2022) 中山間地域居住医療機関通院者の孤独感と健康度の関連：質問紙を用いた観察横断研究. 日本農村医学会誌71 (1) .
- 佐藤美樹、田高悦子、有本梓 (2014) 都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因－乳幼児の年齢集団別の検討. 日本公衛誌61 (3) .
- 土屋政雄 (2015) 尺度研究の必須事項. 行動療法研究41 (2) .
- 豊島彩、佐藤真一 (2021) 日本語版UCLA孤独感尺度 (第3版) 短縮版の開発. 老年臨床心理学研究2.
- 永井真由美、東清己、宗正みゆき (2016) 在宅高齢者を介護する高齢介護者の孤独感とその関連要因. 日本地域看護学会誌Vol.19 (1) .
- 内閣官房孤独・孤立対策担当室、孤独・孤立の実態把握に関する全国調査 (令和4年) 調査結果のポイント.
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodoku_koritsu_taisaku/zittai_tyosa/r4_zenkoku_tyosa/tyosakekka_point.pdf
- 名取初美、有井良江、萩原結花、井上友美、渡辺幸恵 (2007) 産後 1ヶ月時と 3ヶ月時の母親の孤独感とその露響要因. 平成18年度山梨県立大学共同研究費助成研究成果報告書.
- 広沢俊宗 (2011) 孤独感に関する心理学的研究 (I) 課題と展望. 関西国際大学研究紀要12.
- 堀純子 (2023) 日本における孤独・孤立の現状と対策. 国立国会図書館調査及び立法考査局レファレンス866.
- 舩田ゆづり、田高悦子、臺有桂 (2012) 高齢者における日本語版UCLA孤独感尺度 (第3版) の開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本地域看護学会誌Vol.15 (1)
- 丸山菜穂子 (2017) 妊婦の孤独感：関連要因と母性役割の同一化およびマイナートラブルへの影響. 日本助産学会誌31 (1) .

資料(調査票)

日常生活に関するアンケート

Q 1. あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。「非常に不満」を 0 点、「非常に満足」を 10 点とすると、何点くらいになると思いますか。

非常に 不満										非常に 満足
0 点	1 点	2 点	3 点	4 点	5 点	6 点	7 点	8 点	9 点	10 点

Q 2. 以下の各項目について、最近 2 週間のあなたの状態に最も近いものに印をつけてください。

	いつも	ほとんどいつも	半分以上の期間を	半分以下の期間を	ほんのたまに	まったくない
①明るく、楽しい気分で過ごした	5	4	3	2	1	0
②落ち着いた、リラックスした気分で過ごした						
③意欲的で、活動的に過ごした						
④ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた						
⑤日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった						

Q 3. あなたは現在、あなたご自身の人とのつながりにどの程度満足していますか。「非常に不満」を 0 点、「非常に満足」を 10 点とすると、何点くらいになると思いますか。

非常に 不満										非常に 満足
0 点	1 点	2 点	3 点	4 点	5 点	6 点	7 点	8 点	9 点	10 点

Q 4. あなたの現在の健康状態はいかがですか。

1. よい 2. まあよい 3. ふつう 4. あまりよくない 5. よくない

Q 5. 過去 30 日間の間にどのくらいの頻度で次のことがありましたか。

	全くない	少しだけ	時々	たいてい	いつも
①神経過敏に感じましたか	0	1	2	3	4
②絶望的だと感じましたか					
③そわそわ、落ち着かなく感じましたか					
④気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか					
⑤何をするのも骨折りだと感じましたか					
⑥自分は価値のない人間だと感じましたか					

Q 6. あなたの現在の婚姻状況をお答えください。なお、「配偶者」には事実上夫婦として生活しているが、婚姻届を提出していない場合や同性パートナーを含めます。

1. 未婚 2. 配偶者あり 3. 死別 4. 離別

資料(調査票)

(Q6：1⇒Q7≠2・4・5、Q6：3-4⇒Q7≠5)

Q7. あなたの同居人に該当する人をすべてお答えください。あなたとの続き柄でお答えください。

0. いない（単身）

1. 祖父母

2. 配偶者の祖父母
3. 父母

4. 配偶者の父母

5. 配偶者、同性パートナー
6. 兄弟姉妹

7. 子供

8. 子供の配偶者
9. 孫

10. 孫の配偶者

11. その他

(Q7：1～11)

Q8. あなたは現在、何人でお住まいですか。あなたご自身を含めた人数を記入してください。

Q9. お住まいの住居の種類と建て方についてお答えください。

(1) 住居の種類

1. 持ち家
2. 民間の賃貸住宅
3. 社宅・公務員住宅等の給与住宅
4. 都道府県、市区町村、都市再生機構・公社等の公営賃貸住宅
5. 貸し間・その他

(2) 建て方

1. 一戸建て
2. 共同住宅（マンション・アパート等）

Q10. あなたがお住まいの都道府県名・市区町村名をお答えください。

都道府県名：

市区町村名：

Q11. それぞれの項目について、あなたはどのくらいの頻度で感じているかお答えください。

	決してない	ほとんどない	時々ある	常にある
① 自分には人との付き合いがないと感じることがありますか	1	2	3	4
② 自分は周りの人たちと共通点が多いと感じることがありますか				
③ 自分には親しい人たちがいると感じますか				
④ 自分は取り残されていると感じることがありますか				
⑤ 自分のことを本当によく知っている人は誰もいないと感じることはありますか				
⑥ 自分は他の人たちから孤立していると感じることはありますか				
⑦ 自分を本当に理解している人がいると感じますか				
⑧ 周りの人たちと一体感がもてないと感じることがありますか				
⑨ 話し相手がいると感じますか				
⑩ 頼れる人がいると感じますか				

Q12. あなたの職業をお答えください。

1. 正規の職員・従業員
2. 非正規の職員・従業員（契約社員・嘱託、派遣社員、パート・アルバイト(学生・生徒のアルバイトを除く)
3. 会社等の役員
4. 自営業（家族従業を含む）
5. 内職
6. 学生・生徒
7. 就業していない（求職中）
8. 就業していない（求職していない）

資料(調査票)

(Q12:1~5)

Q13. 最近4週間のあなたの全般的な仕事の出来は何点くらいになるでしょうか。「最悪の出来」を0点、「最高の出来」を10点とすると、何点くらいになると思いますか。

最悪の 出来										最高の 出来
0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点

Q14. あなたが最後に卒業した学校をお答えください。在学中の方は在学している学校をお答えください。

1. 中学校 2. 高等学校 3. 専門学校 4. 短大・高専 5. 大学 6. 大学院

Q15. あなたはどの程度、孤独であると感じることがありますか。

1. 決してない 2. ほとんどない 3. たまにある
4. 時々ある 5. しばしばある・常にある

Q16. あなたは日頃どの程度、外出していますか。

1. 週5日以上 2. 週3~4日程度 3. 週1~2日程度
4. 週1日未満 5. 外出しない

(Q16:1~3)

Q17. 最近1週間の外出の目的は何ですか。あてはまるものをすべてお答えください。

1. 仕事・学校 2. 人とのつきあい・交流
3. 趣味や娯楽、散歩や運動 4. 地域活動・ボランティア活動
5. 食事・買い物・日常の用事 6. 通院
7. その他

(Q7:0⇒Q18≠2)

Q18. 最近1週間の行動範囲に含まれているものをすべてお答えください。

1. 自宅(自室)
2. 自宅(家族と共用の部屋)
3. 実家、親族・友人等の家
4. 職場や学校等の拠点
5. 趣味や活動等の場(職場・学校以外の場)
6. 不特定多数の人が利用する場所(公共施設、商業・娯楽・飲食等の施設、公園等)
7. その他

(Q7:1&Q7≠2-12⇒Q19≠2)

Q19. あなたが「居場所」と感じる場所をすべてお答えください。

1. 自宅(自室)
2. 自宅(家族と共用の部屋)
3. 実家、親族・友人等の家
4. 職場や学校等の拠点
5. 趣味や活動等の場(職場・学校以外の場)
6. 不特定多数の人が利用する場所(公共施設、商業・娯楽・飲食等の施設、公園等)
7. その他
8. ない

Q20. あなたの世帯の年間収入(税・社会保険料込み)をお答えください。

1. 100万円未満 2. 100~200万円未満 3. 200~300万円未満
4. 300~400万円未満 5. 400~500万円未満 6. 500~700万円未満
7. 700~1000万円未満 8. 1000~1500万円未満 9. 1500~2000万円未満
10. 2000万円以上

資料(調査票)

Q21. あなたの現在の暮らし向きはいかがですか。

1. 大変ゆとりがある 2. ややゆとりがある 3. 普通
4. やや苦しい 5. 大変苦しい

Q22. 次の①～⑩の各項目について、あなたご自身に該当するほうをお答えください。

①あなたはまわりの人たちとうまくいっていると思いますか	1.そう思う	2.そう思わない
②あなたは人とのつきあいがないほうですか	1.ないほうだ	2.あるほうだ
③あなたには親しくしている人がいますか	1.いる	2.いない
④あなたのことを本当によくわかってくれる人はいないと思いますか	1.いないと思う	2.いると思う
⑤あなたは何かをやりようとした時、一緒にできる人はいますか	1.いる	2.いない
⑥あなたは他の人から孤立しているように思いますか	1.そう思う	2.そう思わない
⑦あなたのことを本当に理解している人はいますか	1.いる	2.いない
⑧あなたは独りぼっちだと感じますか	1.感じる	2.感じない
⑨あなたのまわりには心の通じ合う人がいますか	1.いる	2.いない
⑩あなたには話し相手がいますか	1.いる	2.いない
⑪あなたは、いわゆる「お一人様」向けの店やサービスを利用しますか	1.利用する	2.利用しない

Q23. あなたの家族や親戚、友人について、次の①～⑥の各項目にお答えください。

	いない	1人	2人	3人	4人	5人以上
【家族や親戚】						
①少なくとも月に1回、会ったり話をしたりする家族や親戚は何人いますか。	0	1	2	3	4	5
②あなたが、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる家族や親戚は何人いますか。						
③あなたが、助けを求めることができるくらい親しく感じられる家族や親戚は何人いますか。						
【友人】						
①少なくとも月に1回、会ったり話をしたりする友人は何人いますか。						
②あなたが、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる友人は何人いますか。						
③あなたが、助けを求めることができるくらい親しく感じられる友人は何人いますか。						

Q24 SNSの利用状況をお答えください。

- ①あなたが現在利用しているSNSを全てお選びください。
②その内、最もよく利用しているSNSを1つお選びください。

	①現在利用しているSNS	②最もよく利用しているSNS
1. LINE (ライン)		
2. X (エックス) ※Xは旧Twitter(ツイッター)の現サービス		
3. Facebook (フェイスブック)		
4. Instagram (インスタグラム)		
5. mixi (ミクシ)		
6. その他		
7. SNSを利用していない		

資料(調査票)

(Q24 : 1-6)

Q25 あなたは、最近1年以上に渡って会わずに、SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人が何人いますか。

0. いない

1. 1人

2. 2人

3. 3～4人

4. 5～8人

5. 9人以上

(Q25 : 1～5)

SQ25 最近 1 年以上に渡って会わずに、SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人について、次の①～④の各項目にお答えください。

	いない	1人	2人	3人	4人	5人以上
①SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人のうち、少なくとも月に1回、SNS で連絡を取っている人は何人いますか。	0	1	2	3	4	5
②SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人のうち、個人的なことでも話することができるくらい気楽に感じられる人は何人いますか。						
③SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人のうち、助けを求めることができるくらい親しく感じられる人は何人いますか。						
④SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人のうち、あなたが「友人」と呼べる人は何人いますか。						

(Q26②・Q26④⇒Q24 : 1-6)

Q26. あなたの交流や社会活動の頻度について、次の①～④の各項目にお答えください。

	まったく ない	月に 1回未 満	月 1回 程度	月に 2・ 3回 程度	週 1回 程度	週に 2・ 3回 程度	ほぼ 毎日
①あなたは現在どのくらいの頻度で家族・親戚と会ったり、連絡を取ったりしていますか。	0	1	2	3	4	5	6
②そのうち、あなたはどのくらいの頻度で、SNS で家族・親戚と連絡を取っていますか。							
③あなたは現在どのくらいの頻度で友人と会ったり、連絡を取ったりしていますか。							
④そのうち、あなたはどのくらいの頻度で、SNS で友人と連絡を取っていますか。							
⑤あなたは現在どのくらいの頻度でボランティア活動（PTA 活動等を含む）、自治会・町内会などの地域コミュニティの活動（趣味やスポーツを含む）などに参加していますか。							

資料(調査票)

今後の調査・分析の改善に向けてご協力ください。

Q27. このアンケートの質問のうち、あなたが答えたくなかった質問はありましたか。(1)～(6)のそれぞれについて、あてはまるものをすべて選んでください。

(1) あなたご自身や世帯の実態に関して、答えたくなかった質問

1. あなたの職業
2. あなたが最後に卒業した学校・在学中の学校
3. あなたの健康状態
4. あなたの婚姻状況
5. あなたの同居人（続き柄）
6. あなたの世帯の人数
7. あなたの住居の種類（「持ち家」「貸し間」等）
8. あなたの住居の建て方（「一戸建て」「共同住宅」）
9. あなたが住んでいる地域（都道府県名・市区町村名）
10. あなたの世帯の年間収入
11. あなたの現在の暮らし向き（「大変苦しい」「大変ゆとりがある」等）
12. 特にない

(2) あなたご自身の生活行動に関して、答えたくなかった質問

1. 日頃の外出頻度
2. 最近の外出の目的
3. 最近の行動範囲（「自宅（自室）」「職場・学校」等）
4. あなたが利用している SNS
5. 家族・親戚と会ったり、連絡を取ったりする頻度
6. SNS で家族・親戚と連絡を取る頻度
7. 友人と会ったり、連絡を取ったりする頻度
8. SNS で友人と連絡を取る頻度
9. ボランティア活動、地域コミュニティの活動への参加頻度
10. 特にない

(3) あなたご自身の人との関わりに関して、答えたくなかった質問

1. 少なくとも月に 1 回、会ったり話をしたりする家族や親戚の人数
2. あなたが、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる家族や親戚の人数
3. あなたが、助けを求めることができるくらい親しく感じられる家族や親戚の人数
4. 少なくとも月に 1 回、会ったり話をしたりする友人の人数
5. あなたが、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる友人の人数
6. あなたが、助けを求めることができるくらい親しく感じられる友人の人数
7. 1 年以上に渡って会わずに、SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人数
8. SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人のうち、少なくとも月に 1 回、SNS で連絡を取っている人数
9. SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人のうち、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる人数
10. SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人のうち、助けを求めることができるくらい親しく感じられる人数
11. SNS だけでお互いに連絡を取り合っている人のうち、「友人」と呼べる人数
12. 特にない

資料(調査票)

(4) あなたご自身の人との関わりの実感に関して、答えたくなかった質問

1. 「自分には人との付き合いがない」と感じる頻度
2. 「自分は周りの人たちと共通点が多い」と感じる頻度
3. 「自分には親しい人たちがいる」と感じる頻度
4. 「自分は取り残されている」と感じる頻度
5. 「自分のことを本当によく知っている人は誰もいない」と感じる頻度
6. 「自分は他の人たちから孤立している」と感じる頻度
7. 「自分を本当に理解している人がいる」と感じる頻度
8. 「周りの人たちと一体感がもてない」と感じる頻度
9. 「話し相手がいる」と感じる頻度
10. 「頼れる人がいる」と感じる頻度
11. 「孤独である」と感じる頻度
12. 特にない

(5) あなたご自身の生活実感や生活意識に関して、答えたくなかった質問

1. あなたが「居場所」と感じる場所
2. 現在の生活への満足度
3. 最近の仕事の出来具合
4. 現在の人とのつながりの満足度
5. 最近「明るく、楽しい気分で過ごした」頻度
6. 最近「落ち着いた、リラックスした気分で過ごした」頻度
7. 最近「意欲的で、活動的に過ごした」頻度
8. 最近「ぐっすりと休め、気持ちよくめざました」頻度
9. 最近「日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」頻度
10. 最近「神経過敏に感じた」頻度
11. 最近「絶望的だと感じた」頻度
12. 最近「そわそわ、落ち着かなく感じた」頻度
13. 最近「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じた」頻度
14. 最近「何をするのも骨折りだと感じた」頻度
15. 最近「自分は価値のない人間だと感じた」頻度
16. 特にない

(6) あなたご自身の人との関わり方の自己認識に関して、答えたくなかった質問

1. あなたはまわりの人たちとうまくいっていると思うか
2. あなたは人とのつきあいがないほうか
3. あなたには親しくしている人がいるか
4. あなたのことを本当によくわかってくれる人はいないと思うか
5. あなたは何かをやろうとした時、一緒にできる人はいるか
6. あなたは他の人から孤立しているように思うか
7. あなたのことを本当に理解している人はいるか
8. あなたは独りぼっちだと感じるか
9. あなたのまわりには心の通じ合う人がいるか
10. あなたには話し相手がいるか
11. あなたは「お一人様」向けの店やサービスを利用しているか
12. 特にない

Q28. あなたは、最近1年間でアンケート調査に何回程度回答しましたか。Web モニターアンケート以外のアンケート調査（例：郵送アンケート、街頭アンケート等）も含めた総数でお答えください。

- | | | |
|---------------|-----------|----------|
| 1. 1回（今回が初めて） | 2. 2回 | 3. 3～4回 |
| 4. 5～9回 | 5. 10～19回 | 6. 20回以上 |

● 会社名	株式会社サーベイリサーチセンター
● 所在地	東京都荒川区西日暮里2丁目40番10号
● 設立	1975(昭和50)年2月
● 資本金	6,000万円
● 年商	106億円(2022年度)
● 代表者	代表取締役 藤澤 士朗、長尾 健、石川 俊之
● 社員数	社員:317名 契約スタッフ:484名(2023年3月1日現在)
● 事業所	東京(本社)、札幌、盛岡、仙台、北陸、静岡、名古屋、大阪、岡山、広島、高松、福岡、熊本、那覇
● 主要事業	世論調査・行政計画策定支援、都市・交通計画調査、マーケティング・リサーチ
● 所属団体	公益財団法人 日本世論調査協会 一般社団法人 日本マーケティング・リサーチ協会(JMRA) 日本災害情報学会 一般社団法人 交通工学研究会 他
● その他	ISO9001認証取得(2000年6月) プライバシーマーク付与認定(2000年12月) ISO20252認証取得(2010年10月) ISO27001認証取得(2015年11月)※ ※認証区分及び認証範囲: ・MR部及びGMR部が実施するインターネットリサーチサービスの企画及び提供 ・全国ネットワーク部及び沖縄事務所が実施する世論・市場調査サービスの企画及び提供

本件に関するお問い合わせ先

株式会社サーベイリサーチセンター

<https://www.surece.co.jp/>

- 広報担当:品質部 松下 正人 E-mail:src_support@surece.co.jp
TEL:03-3802-6779 FAX:03-3802-6729
- 調査担当:世論計画部 木村浩巳 E-mail:kimura_h@surece.co.jp
TEL:03-6826-4666 FAX:03-6826-4777
- 研究者の方にはローデータの提供が可能です。ローデータに関しては調査担当にお問い合わせください。
- 調査結果の引用にあたっては、調査主体名として「株式会社サーベイリサーチセンター(東京都)」を必ず明記して利用してください。
- 調査結果の無断転載・複製を禁じます。
- 本紙に記載している情報は、発表日時点のものです。